

vol.0



Opensource Products

nov. 16 2024

12:00-14:30

@mejiro center

toolbox showroom B1

***Special Thanks to
GELCHOP MOONEYES***

***edit by
sea
(toolbox search & research)***



既製品の先にあるもの

時折、自宅のプランニングやパーツを選定しているお客様と「toolboxの商品を“素材”として使ってもらえたら…」といった話をすることがある。

自己責任の範囲で、私たちtoolboxは商品や付随するパーツ類を自由にアレンジ、カスタマイズ、モディファイ(手直し)、リプレイス(置き換え)することを応援している。それは「手を加える」というアプローチが個人に寄り添った愛着や満足、使いやすさを生み出すと知っているから。

ならばもっと手を出しやすいように、例えば照明のシェードの開口やネジ山のサイズ、吊り戸棚の扉の寸法、使われている素材などの商品にまつわるデータを公開(オープンソース化)してみてもどうかという案が生まれた。現在その企画を「オープンソースプロダクツ」と名付け、手始めにいくつかオリジナル商品のオープンソース化に向けて動き出している。

近い未来、オープンソース化された商品の情報をもとに、サードパーティー(第三者)によるカスタムパーツやオプションなどの開発に繋がっていったら面白そう。それはiPhoneと多種多様なiPhoneケースとの関係のように、車とチューンナップパーツの関係のように。既製品の仕様にとらわれず、自分仕様に合わせていく内装のつくりかた。

今回は、長いあいだ既製品に手を加え続けている3D造形グループGELCHOPと、サザン カリフォルニア カー ライフ スタイル をサポートする企業MOONEYESが、工業系レセップをオープンソースとしてつくってくれたモノたちを展示。

この展示が既製品の先にある楽しさや自由度を知るきっかけとなり、家を自分仕様に近づけていく「半歩未来の家づくり」の手立てのひとつになったら嬉しい。



可能性は照らされた

「おもしろくなっちゃって、いっばいつくっちゃった。」
作品を引き取りに伺うと、開口一番モリカワさんは言った。

事前の会話では細かなところまでは決めず、工業系レセップをオープンソースにつくっていただけたら…と、大筋を決めただけだったこともあり、開けるプレゼントの箱が急に増えたようで嬉しかった。

キャラの濃いものばかり総勢10点。中には原型が分からないくらいアレンジされたものまである。会場に身を置いていると、見慣れた工業系レセップの方からマックスここまでできるんだよ、と背中を押された気分になってくる。

普段生活していると、いつのまにか既製品＝完成品＝手を加えられないもの、というフィルターがかかってしまう。

本来そこにあるものは完成品でもあり、ポテンシャルを秘めたパーツでもあるのだ！GELCHOPのつくりだしたのたちを見ているとそうハッとさせられる。その瞬間モヤのかかったフィルターがフッと消え、可能性の妄想が視界に広がる。

テキスト 石田勇介











自然体の会話から

MOONEYESはUSA Carのパーツ製造にはじまりモーターサイクルパーツやウェア、ノベルティまで扱う「サザン カリフォルニア カー ライフ スタイル」をサポートする企業。本牧のショップ、MOONEYES Area-1には圧倒される量のカスタムパーツ類が所狭しと並んでいる。

その中で代表的なものに空力に優れファッション性も高い円盤状のアルミ製ホイールキャップ「ムーンディスク」がある。これはアルミ板を治具に押し当て絶妙な力加減で成形する「ヘラ絞り」の技法で製造されているパーツだ。

つくる過程で中央部分が円形に切り抜かれ端材が生まれる。その円盤状の材をそのまま用いたシェードが、「工業系レセップ」のオープンソースプロダクトとしてつくられた。

この話だけ聞くと、廃品を上手に利用しただけのように思われるかもしれない。ただ僕はこのシェードが生まれる過程が、設計や計画からのスタートじゃない、人のアクションからタイミングよく生まれたという部分に惹かれた。

コトはtoolbox商品開発チームの仙波が、高校時代の旧友に連絡を取るところから始まる。「最近toolboxというところに転職してさ、建材売っている会社なんだけど。なんか一緒にできたらいいね。」よくある会話である。

その友人というのがその友人というのが MOONEYES の角さんだ。角さんは、例の切り抜いた方の材を仙波に渡す。このとき仙波は製造社の事業撤退で惜しくも廃盤となった「工業系レセップ」の復刻を済ませたタイミングだった。

シェード用の型をおこすわけでもなく、マーケティングリサーチをするわけでもなく、意匠的なフォルムを付加するわけでもなく、友人同士の自然体の会話から生まれた、自然な無理のないプロダクト。しかもここが大事な部分だけど、レセップにぴったりお似合いなのだ。

テキスト 石田勇介

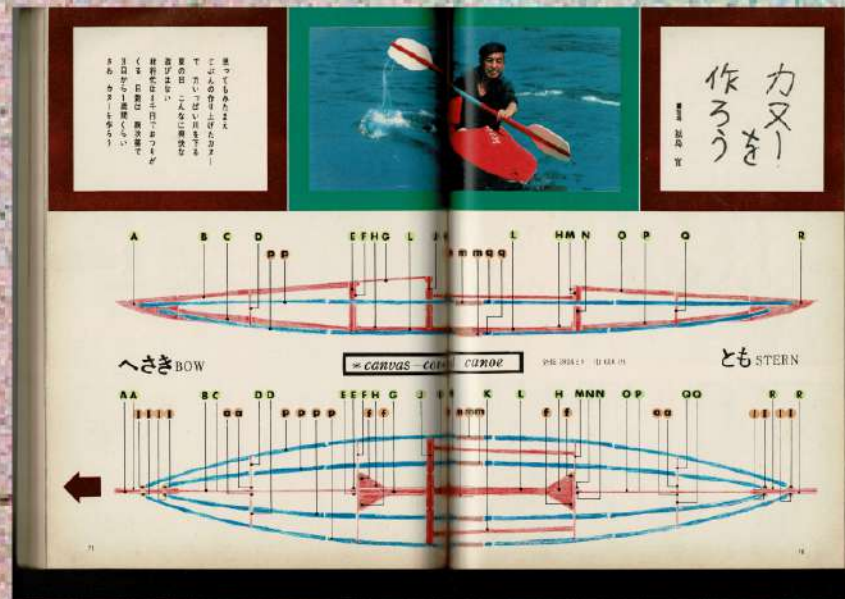




「MOON Garage」でのコマショーを見ているような車やバイクが鎮座。周辺に工具やマシン、ピストライプなど、大量のパーツ類が並ぶ。右が角さん、左が仙波。二人が揃うと話題が尽きない。取材時もまた何か始まりそうな雰囲気満々。

toolboxの展示のハナシ

テキスト 平山祐樹



1969 early summer 暮らしの手帖をメルカリで買っていた。
そこには「カヌーの作り方」が載っているのだ。

土曜日の夜、父親に電話をする。昔話をよくはじめる。そこでなんでカヌーの話なんかになったのか、
、
早く結婚しろ。結婚相談所に登録するか。趣味は何だ？という投げかけ。僕は趣味は無いと思ったが、
面倒なのでDIYと答えた。でも本当はDIYをじているかどうかわからないと思った。いつもやっている
わけではないけど、いつも囚われているような感覚もある。いつも作りたいモノがあって、それがすぐで
きず、1年後にやっていたりしている。

そこから父のDIYの話がはじまったのだ。50年以上前、父が18か19歳の時である。祖母が「暮らしの
手帖」を購読していてたまたま見つけた記事。ちょうど2週間後に友人とのキャンプを予定していた。そ
こまでの間、朝から晩まで鶏小屋の使っていない片隅にこもりぎり一人乗りのカヌーを作り上げた。

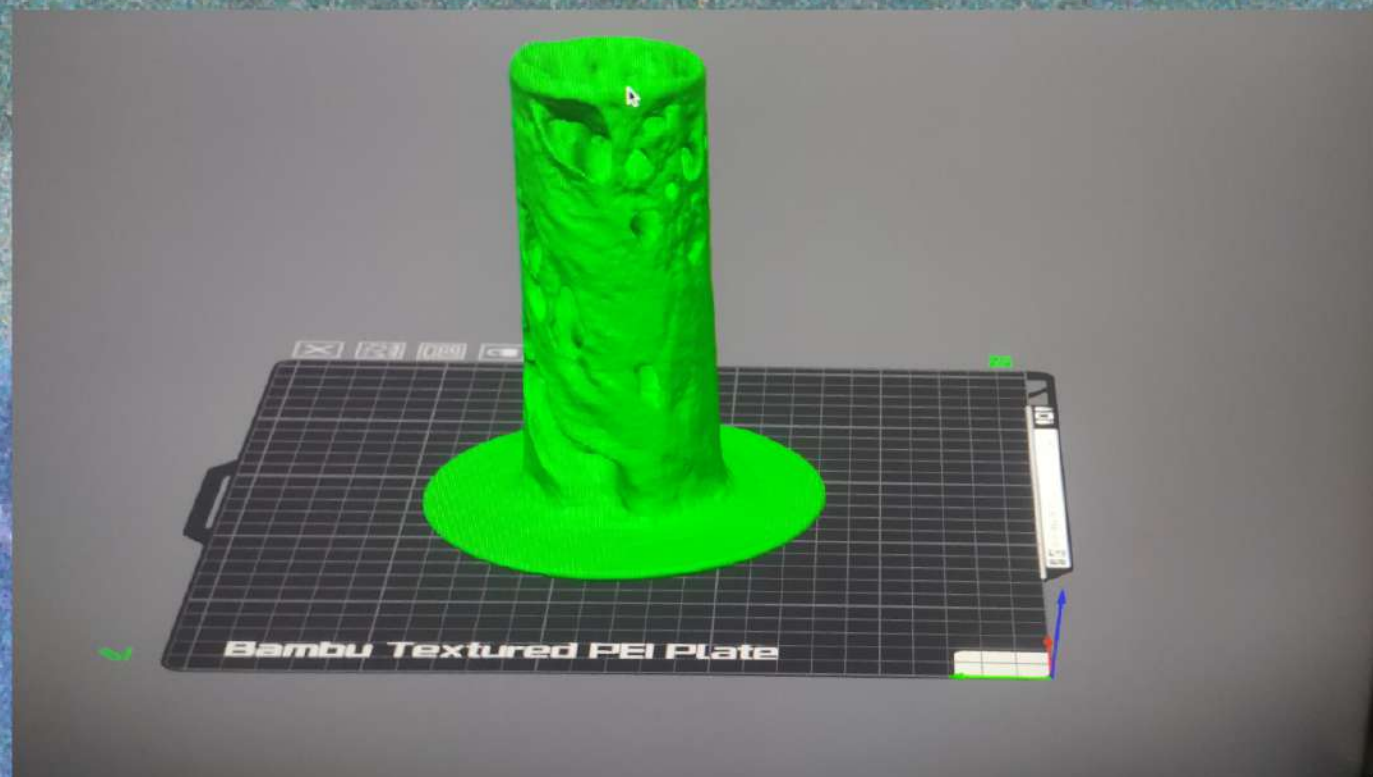
木材は親戚の材木店から入手。オールは雪かきの棒を近くの親戚宅から借用した。桹の木の先端につ
くプラスチックの雪かき部分を外し、平たい木材を固定した。(借用したと父は言ったがよくよく話を
聞くと勝手に持って行って改造している)。塩ビパイプは近所の水道屋さんから貰った。あとはカヌー
に張るための防水性の帆布が必要だ。これも近所のシート屋に頼んで端材で作ってもらった。金物屋
が無いので、接続部品も自分でつくった。高校生でお金がなかった。でも色々うまくいった。

父がカヌーを作ったのは50年以上前の青森県である。全国的にみたら、同じ号の「暮らしの手帖」を
みて、同じことをした作り手がたくさんいたのかもしれない。こうした本、広告、憧れの媒体が1人の青
年の行動を生んでいた。



ある日ヤフオクで見つけたドレン管。僕はドレン管がなにか最初はわからなかった。なんだこれ。でも
直感的に工業系レセップのカバーとして使えそうだと思った。





ただ手元には一つしか無い。たくさんつくるにはどうすればよいのか？父が身の回りにあるものや技術を寄せ集めてカヌーをつくったように、自分の手の届く範囲のいろいろな手法で試してみた。

- ①frpドレンをiphoneでキャプチャリングし、3Dプリンタで成形する
 - ・フォトグラメトリ(撮影した写真をもとに3Dモデルを作成)
 - ・フォトグラメトリ(上記の動画版。処理方法は同じだけど、動画で撮る分スムーズにスキャンできる)
 - ・LiDARスキャン(iDARセンサーを利用した3Dスキャン)
- ②手芸が得意な知人に依頼して、このドレンと同じ形を作る。
- ③シリコンで型を取り、樹脂を流し込む。



じつはCNCや3dプリンターでドレン管をつくるのも、父がカヌーをつくりあげたのも、そんなに変わらないのか？それが今回toolboxで行う制作物の展示のテーマになった。僕らは同じモノを違う手法で、それがその時のメディアや新しい技術、時に材の供給側の都合や自分の身の回りにある条件のなかから、どうにかこうにか作れないかと試行錯誤している。

もちろん技術的な発展はあるが、それが簡単かといえばそうではない。モデリングするのも、知り合いや近所の店からタダ同然でモノもらうのも、同じくらい難しい。ただ、同じモノを作るためのアプローチが、実はとても自由なモノ、個別な事情を抱えたユニークなモノを生むきっかけになっている。

失敗したらまた刷ればよい。同じことをできるという自由が、違うことをやろうという創造性や失敗を許すゆとりを生む。

僕はまた別の素材や作り方を考えはじめる。
そして土曜日の夜、父にまた電話するんだ。



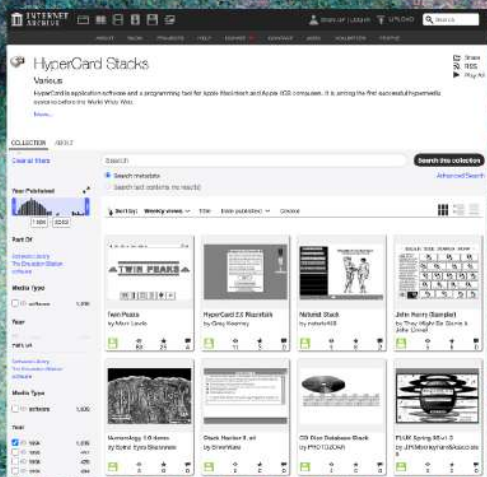
オープンソースってなんだろう

テキスト 平山祐樹

ある時僕は今まで自分でやってきたDIYを解体していこうと思った。取り付けた棚を外し、後置きのフロアリングを部屋の真ん中だけ剥がした。
その作業の中で、あ、今のこの状態がこいいじゃん、この状態を保存したいと思った。その時初めて僕は自分の家を好きになった。

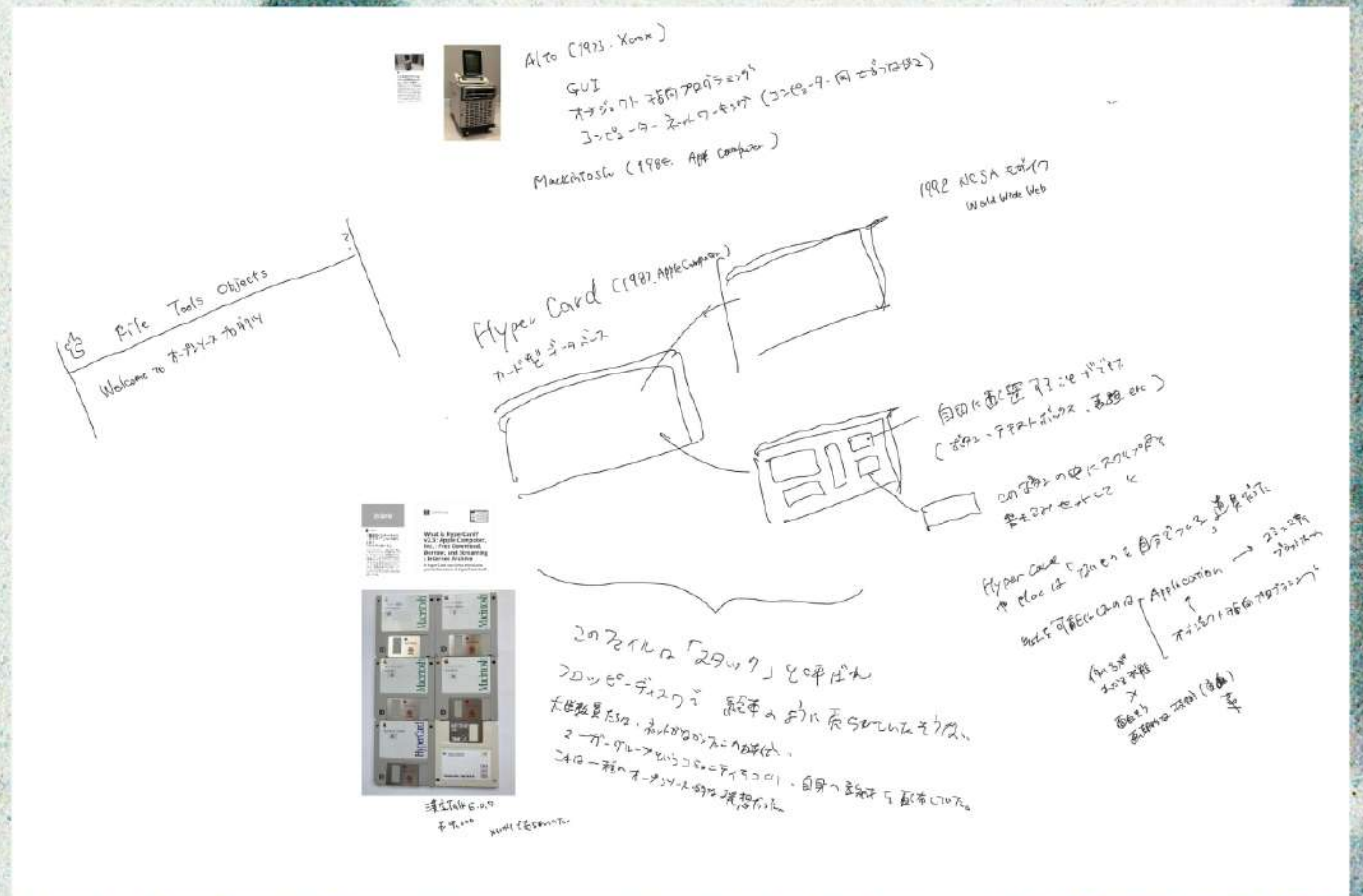


オープンソースという言葉の歴史を調べてみると、1972年、アラン・ケイを中心とした研究グループは「Alto」という現在のパーソナルコンピュータの原型となるワークステーションを製作した。それはグラフィカルユーザーインターフェース（GUI）、今ではPCとして当たり前の、マウスがあってそれを画面上で操作できる機能が搭載されていた（それ以前は黒い画面をカタカタとコマンドを打ち込む世界だった）。

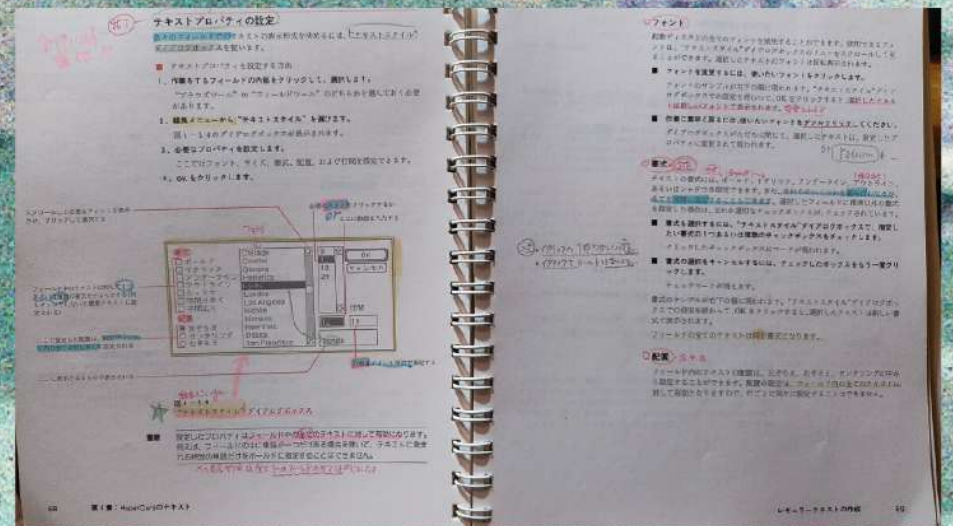


Internet Archive HyperCard Stack: webブラウザ上で動くhypercardのスタックのアーカイブ

スティーブ・ジョブズはこのGUIに可能性を見出し、1984年の「Mackintosh」の発売につながっていくことになる。時を同じくしてウォード・カニンガムは1987年、HyperCard（ハイパーカード）というシステムを使って、Mackintosh上で動く「パターンブラウザ」というソフトウェアを作り上げた。このHyperCardはカード型のGUIとデータベースをつないだ表側と裏側の仕組みがわかりやすくつながったプログラムだった。



これらはオープンソースな仕組みとして公開されていたため、誰もがソースを自分用にいじってページをつくることができた（この技術がwikipediaにつながっていった）。そのためファイルはフロッピーディスクに保存され、絵本のように売られていたそうである。ネットのなかったこの時代、例えば大学教員たちはユーザーグループというコミュニティをつくり、自身の教材を配布していた。これは一種のオープンソース的な活動だった。



メルカリで購入したHyperCardのマニュアル。持ち主の方の膨大なメモが記載されていた。マニュアルを読むと実機を触ったことがなくてもわかりやすい内容で、むしろデジタルネイティブである我々の感覚では当たり前の操作方法と感じるものもあった。

HyperCardは「無いものを自分でつくる道具」だった。

僕らはこれらをヒントにしつつ「オープンソース」という言葉をきっかけに、内装や建材、toolbox、その周りにいる人たちをつなげる何か仕組みやきっかけとなるプロダクトなどを作れないかと構想し始めた。

住宅は完成されたものを買うというのが当たり前になっている。少し手を加えるといっても、配置を変えたり部分のリプレイスということぐらいだ。この「イじる」ということが許されていることなんだということ、toolboxのプロダクトで試してみたいというのがオープンソースプロダクトの取り組みである。

このいじり方にも色々なやり方や難易度、偶然生まれたものや計画的に設計して生まれるモノもあるだろう。僕らはそれを全部受け入れたいというか楽しみたい。どこかで建築とそうでないモノとか、ちゃんとしているものとそうでないものとか、そういう線引きをしないで、皆さんがもっている発想や独自の解決方法を見てみたい、そう思ったのである。



街中のオープンソースプロダクト

このプロジェクトをはじめて、街の中の風景により関心をもつようになった。というのはそれらがもつ即興的な解決やその風景の中にあるやさしさ、人の営みが面白く、時にとても力強く見えた。

あれ、そういえばそんな写真って昔から撮っていたんじゃないか。と思い過去10年程のgoogle photoを見返していた。それをinstagramにアップしています。

